

さざなみ

# 国語教室

さざなみ国語教室  
 第508号 2024年7月25日  
 発行者代表 吉永幸司  
 連絡先 大津市柳川2-11-5  
 TEL 077-522-1008  
 発行所 滋賀児童文化協会  
 NPO 現代の教育問題研究所

第六回 全国国語実践研究会 滋賀大会  
 (期日:2月26日~27日 会場:クサツエストピアホテル)  
**「言葉による見方・考え方を高める国語科の授業」**

森 邦博

テーマへの構え

滋賀大会開催に際し、さざなみ国語教室同人でテーマについての意見を交流する機会を持った。私たち一人一人が課題意識を確かにして大会に臨みたいと考えたからである。

言葉による見方・考え方を働かせ高め合う児童生徒の育成が、国語科授業の要諦であることは誰もが同感することであった。

では、具体的に、「どのような」・「どのように」と問いを進めた。

児童生徒が言語活動(話す聞く・書く・読む)を通して適切に理解・思考・判断・表現する力。言葉による発信者としての責任を果たす謙虚で真摯な態度。このような言葉の遣い手としての力と態度が高まる学習過程を実現していくこと

が何より大切になる。それは一時間、一単元の授業だけで完結とせず、単元相互を見通し、年間を通じての指導と評価を積み上げていくことである。さらには、学年間を通して発展のある学校全体の教育計画と、読書や書くことなどの子どもの言葉の生活の耕しの視点も大切だと考える。

滋賀大会の意義と役割

全国国語実践研究会では、これまで具体的な実践の提案を通して「実践の理論」を研究協議し、参加者相互に考えを深め合ってきた。「私の国語教室の授業改善のためには、何を、どのように活かしていくのか?」(ここはどうするのか?)と実践の当事者意識からの、素直な疑問を投げかけることがあって

よい。互いに理解を確かにし、思いを強くしてきたのが本研究会の歩みそのものであると思っている。それが、実践提案者の「実践の理論」に学び合う場・時間としての本研究会の意義と役割であるのだとも考える。滋賀大会においても、真摯な学び合いの時間が生まれ、お互いの明日からの授業を変えられる力としていただければこれほど嬉しいことはない。

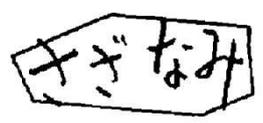
第二步、第三步を期待して

昨年度数年ぶりに再開した全国国語実践研究会の足取りを、力強い確かな第二步、第三步の歩みにつなげていきたい。

各県の国語実践研究会の皆様との絶大な支援と、身近な国語実践同行者へ参加の呼びかけをお願いしたい。

国語の授業の改善と、自ら言葉による見方・考え方を高める子どもへの育成に、熱意をもって日々取り組んでおられる国語実践者、並びに研究者の皆様との出会いを、会の一員として私も今から楽しみにしている。

(全国国語実践研究会理事長)



▼ある日ある時、小耳にはさんだこと。それは、漢字の宿題について保護者の会話。宿題の内容は「今・会」の2文字。同じ文字を数文字繰り返して書く漢字の練習。そして、「会」のつく熟語を3つ考えることであつた漢字ドリル帳には、「音楽会・うんどう会・会社」は既に出ているので、それ以外の熟語を求めていることであつた▼熟語探しに困りじつと考えているので、両親がヒントを与えようとするので、先生が「自分で考えなさい」と言われているという理由で拒否。ヒントを出そうと思つて2年生に理解できる「○○会」は難しいというのがある▼その場の結論であつた▼「自分で考えなさい」は日常的に使っている用語。国語科授業では「じつかり考えてから発表しなさい」「自分の考えをまとめよう」等々。「考える」とは、どういう活動をするかということ、どういうことを指導した経験はあまりない。2年生の子がヒントを参考にすることを「考える」ことではないと理解をしていることを知る機会でもあつた▼「忘年会・女子会」これしか思いつかないわね。」と母親たちはその場を笑いで納めた。が、その子は、宿題をどのように解決したか気になつた。さらに、もし、その子に、「考えるとはどういうことですか。」と質問されたら適切な答えを用意していないことに気が付いた時間でもあつた。

(吉永幸司)

『いざ、実践！』  
井上 凜斗

この4月から、私はさざなみ国語教室に参加した。毎月の例会は、私にとっていつも実りのあるお話ばかりだ。正直、話についていくことで精一杯だが、自分が知らないこと、考えが及ばないことをたくさん教えてもらえることにワクワクしている。

しかし、学んだだけでは力にならない。学んだことはアウトプットしないと意味がない。

そこで、山田先生が実践しておられた『視写』を「一つの花」の学習で実践した。

学級の児童は長い文章の視写は初めてだ。そのため、学習用の視写プリントを作成した。プリントは視写がしやすいように一文ずつの文字数に合わせたマス目をつけた。また、文字抜けがないように、文の一番上の文字だけはわかるように工夫した。

準備は万端！いざ、実践！

子どもたちに全文視写について伝えると、不満の声も少しあった。しかし、視写を始めると、どの子も集中して取り組んだ。

利き手の小指球を黒くしている子や友だちと視写プリントを読み合う子、黙々と取り組む子など、

どの子も自分のペースでと取り組んだ。視写の速さに個人差はあったが、三日間続け、全員が書き終わった時はみんな嬉しかった。

実践から、視写を取り組むことで、教材理解が深まっていることに気づいた。「一つの花」は、戦争中の話であり、内容理解が難しい。

しかし、視写を取り組むことによって、戦争時の情景や背景などを想像することができた。また、物語に繰り返し出てくる言葉、登場人物の行動や台詞など、だいたいの内容を理解していた。そのため、課題作りの時もたくさん疑問や課題を出し合うことができた。課題に対して、叙述をもとに自分の考えをもつこともでき、子ども同士で活発に意見交流もできた。

実践を終えて、『視写』の取り組みが、子どもたちの深い学びにつながられる効果的な手立てだと実感した。教材の内容理解が苦手な子も、この学習では意欲的に交流する様子が見られた。今後、教材に合わせながら、視写を繰り返し取り組ませていきたい。

そして、これからもさざなみ国語教室で学んだことを積極的に実践し、自らの教師力を培っていききたい。子どもたちが深い学びを身につけられるように。

(豊郷町立日栄小学校)

困り感から書く姿を求めて  
畑中 翔太

光村図書6年の「デジタル機器と私」という単元では、グループで提案文を書きます。提案のテーマを決め、説得力を持たせるために情報収集をして、それを付箋に書き溜めていきます。付箋を元に構成を考え、分担を決めて文を書き進めていく流れです。

Kさんのグループでは、「デジタル機器を長時間使い続けると、体に悪影響がある」というテーマを決めて、Kさんは提案のきっかけとなる情報収集することになっていました。Kさんは、どう調べればよいかわからない様子でした。タブレットで「デジタル機器 悪影響」で検索することを勧めました。検索結果から、「スマホの使い過ぎで学習内容を忘れてしまふ」や「スマホの使い過ぎで発熱する」といった情報を見つけて、付箋に書くことができました。

課題解決のための提案を考える時に、Kさんは「スマホを見すぎると目が悪くなる、スクリーンタイマーを設定すればいいやん。」と意見を出しました。(スクリーンタイマーとは、予め機器の使用時間を設定しておいて、その時間になると自動的に画面がロックされるといったもの) Kさん自身が家でスマートフォンを使用するときに

活用している方法だったようです。「いい方法を家でしているのですね。」と声をかけると、嬉しそうに進んで付箋に書いていました。

その後、Kさんは、文章の中の「提案」を書く担当に手を挙げました。しかし手が止まっており、どう書き出してよいか分からない様子でした。私はヒントとして書き出しを書きました。

「このように、長時間使うことは体に悪影響があるので、画面を見る時間を減らすことを提案する。一つ目は、スクリーンタイマーの設定である。スクリーンタイマーとは、」

ヒントとして書きすぎかなとも思いましたが、Kさんがイメージを掴むことが大切だと思いました。Kさんには、この書き出しを読み納得したらなぞってよいと伝えました。なぞり終えたKさんは、そのままスクリーンタイマーの説明と二つ目の提案を自分の力だけで書き続けることができました。

今回、Kさんに「検索の仕方」と「文の書き出し」という支援をすることで、進んで書く姿を見ることができました。また、Kさん自身の体験が出てきたことで、そこを糸口に書くことに繋げることができたと感じます。限られた時間の中で、子ども達のつまづきに寄り添った具体的な支援に心掛けたいです。

(大津市立田上小学校)

**説明文「こまを楽しむ」を学習して**  
 山田 定子

「こまを楽しむ」では、「こまの楽しさ」を精読する時「初め」「中」「終わり」の構成をとらえ、「問い」と「答え」の対応を考える学習を計画した。さらに、学習後には、「感想を交流する」ということで、自分の好きなこまについて、感想(こまの種類、楽しみ方、選んだ理由)をまとめた。同じこまでもいろんな考え方があることに気づくことができた。

また、本文には六つのこまの例が書かれているが、七つ目のこまとして図鑑などで調べたお気に入りこまを、本文の書き方を参考にしながら簡単な紹介文に書いた。どんぐりこま、とび出しこま、ひねりこまなど、いろんなこまについていくつも書く子も出てきた。

例えば、  
 これは、うさぎとかめというこまです。  
 こまを回すと、こまの上ののっているうさぎとかめがえがかれた丸回りが、こまといっしょにまわります。こまが長く回ると、かめが何どもうさぎをおいこします。  
 そして、さいご、こまが止まる時には、かめがリードしたじょうたいで止まります。むかし話の「うさぎとかめ」のようですね。

この学習を通して、  
 ・こまの種類がよくわかった。

・こまのいろんな回し方があることがわかった。  
 ・いろんなこまの特長がわかった。  
 など、こま博士になったような気になっていく。

さらに、単元のおわりには、伝統的な遊びや文様から紹介文を書き交流した。他の伝統的な遊びとして、けん玉、あやとり、お手玉など、今まで自分たちが遊んできたものに目が向けられ、学習に深まりができたと感じている。その時にも、「初め」「中」「終わり」を意識して書くように指導した。書きあがった話は、お互いに読み合い、よい所見つけをし、いろんな考えがあることに気づいたようである。

「こまを楽しむ」の学習に入るところから、家にあるこまを持ちより、休み時間には、お互いにこま回しをして遊ぶ姿が見られた。家にあるこまから、新しく買ってもらったこま(さか立ちこま、鉄しんごまなど)で、友だちとこま回しのわざを競い合うこともあった。遊び係が「こま回し大会」の計画を立て、みんなでこま回しを楽しみ、新たに友だちのよい所も見つけられたようである。

教科書に魅せられ夢中夏の独楽

定子

(野洲市立北野小学校)

**二年生で身に付けさせたい、学習用語**  
 川部 長人

二年生の国語の教科書を見てみると、小学校の国語の学習で大切になる学習用語を初めて学ぶことになる。「場面」や「登場人物」、「メモ」など、今後の学びで大切になる言葉をたくさん学ぶ。「始めが肝心」とよく言われるが、二年生で初めて学ぶ学習用語について、教師の説明だけで終わるのではなく、子どもたちが考えられる授業にしたいと思ひ実践を行った。教材はスイミーで、「場面」についての学習場面である。授業の初めに場面分けのポイントとして「時」「場」「人物」を学習し、教師が分けた1〜5場面について、場面分けの根拠となる言葉を探す学習を行った。

- T1 それでは、みんなで話し合っています。1場面から2場面が変わるとき、どんな言葉に注目しましたか?
- C1 「ある日」
- T2 「ある日」ってことは?
- C2 「ある日」やから場所が変わった。
- C3 ある日やから「時」ちゃう?
- T3 いい言葉に注目しましたね。「ある日」は「時」がかわったと思う人(9割挙手)。「場」がかわったと思う人(挙手0人)。「人ぶつ」がかわったと思う人(挙手0人)。

- O人) はい、「ある日」ってことは、「時」がかわっていますね。
- T4 では、次2場面から3場面はどうですか?
- C4 「くらい海のそこ」っていう言葉に注目しました。
- T5 くらい海のそこから違う場所にかわってるってことやな。
- C5 3場面に「海には」って書いてあるから。くらい海から明るい海にかわった。
- T6 なるほど「海には」ってことは、くらい海から場所がかわったってことやな。こういう明るい場所にかわったんやな。

(4場面も同様に確認する)

- T7 では最後の4から5場面ではどんな言葉に注目しましたか?
- C6 「みんなが一びきの大きな魚みたいにおよげるようになったとき」
- C7 「時」がかわってるんちゃう?
- T8 みんな言葉に注目して、場面が変わるところを探しているのが素晴らしいです。今後も「時」「場」「人ぶつ」がかわるときに場面がかわるので、そういう言葉に注目していきましょう。

学習用語は教師の説明だけで終わってしまうことが多くある。今後子どもに考えさせながら、学習用語を身に付ける授業を行っていききたい。

(湖南省市立菩提寺小学校)

「つながる」授業で  
目指す「自立」と「共生」  
池崎 繁伸

本校の学校創りのテーマを「一人一人のよさが輝くみんなの“あったかい”学校の創造」と掲げ、子どもたちと「あったか魂」を言葉に全校で取組を進めている。今年度から本校はコミュニティ・スクールとなり、より一層「地域とともにある学校」創りを推進しているところである。誰もが安心して過ごすことができ、共に伸びていく“あったかい”学校を、教職員や子どもたち、保護者や地域の方々等、みんなが当事者となって創造することをめざしている。

このような学校創りを推進していくために、「学校づくりは学級づくりから」との考えで、校内研究に取り組んでいる。今年度は研究主題を「全ての子どもたちの可能性を引き出す学びの実現」「つながる」授業で目指す「自立」と「共生」と設定した。子ども一人一人が自分の身近なことから他者のことや社会の様々な問題に至るまで関心を寄せ、自ら主体的に考え行動することができるようになるためには、画一的な一斉授業から脱却し、子どもが学びの主体となる学習へ転換していく必要がある。正解のない変革の時代、目の前の子どもたちの「事実」を見て考え「この子どもたちにとって今、何が必要か」「この子どもたちが将来自立していくために必要な力は何か」を全教職員が常に意識し対話を重ね実践を積み上げていくことが大切である。多様な価値観や考え方を大切に、多様な他者と協働していく力は、自立を目指す上で必要不可欠であるといえる。こうした力の獲得により、多様性に柔軟に対応しながら他者と共生する子どもの姿を目指したい。

ここでは、5年生の国語科「日常を十七音で」の研究授業の概要を紹介したい。本時の目標は「自分の想いを俳句で伝えるために、グループでの話し合いを通して、表現の工夫を施しながら俳句を練り上げることができる」である。めざす子どもの姿は「教師、教材、友達とつながり、目標（めあて）に向かつて協働することができ子ども」校内研究でめざす姿として、①「つながり」を大切に主体的に学び考え抜く姿②自分や友達の「わからない」や「ちがひ」を大切に学ぶ姿が掲げられている。主な学習活動は次の通り。

- 1 本時のめあてを共有する
- 2 表現を工夫して俳句を作る
- 3 グループで作品を練り上げる
- 4 表現を工夫した俳句をワークシートに記す。
- 5 次時の活動を知る。

昨年度から対応の難しい子どもたちが多数在籍し、学習集団づくりに困難さを感じる学年であった。しかし、学年の担任団が、多様な子ども一人一人を大切にするとともに、信頼関係を基盤に安心して何でも言える集団づくりを、一時間一時間の授業を通して行ってきた。教師が学習規律を教えるというより、人権意識に基づいた秩序を子どもたちと共につくってきた印象である。

グループで作品を練り上げる活動場面では、笑顔で生き生きと表現の工夫を仲間と楽しむ姿を見ることができた。学習で心が満たされることの大切さを改めて感じることにできた授業であった。

(彦根市立佐和山小学校)

編集後記

▼6月例会(五〇七回)の提案は井上滉斗さん(日栄小)。研究主題は「言葉による見方・考え方を高める国語科の授業実践」研究教材は「みんなのよさを、みつけたよ」(2年・光村図書)▼指導内容は「組み立てて考える」書き知らせよう」で、知識技能として文章の「組み立て」の理解であり思考力・判断力・表現力の指導内容は紹介をする文章を書く・話し合うという授業構想▼具体的な学習過程は次の通りです。①学習の見通しをもつ②「こんなものを見つけたよ」を地域に探してみつけてメモをもつ③探しめつけてメモをもつ④文章の「組み立て」を決める⑤文章を書く⑥みんなの読み合わせ⑦単元の前半が生活学習の位置付けとした。特に、教科書では、例として、「知らせたいこと・詳しい説明・まとめの言葉」やメモとして、実際の文章を示していることを大事にした授業の提案であることを研究協議では「言葉による見方・考え方」書くことにおける「知識及び技能」について意見を交わしました。「言葉による見方・考え方」については学習対象について理解の仕方や表現の内容に、記述や発言内容を大事することであるという意見もありました。「知識及び技能」については、「組み立て」についてこれからの国語科学習の基礎となるものであることなどについて話し合いを深め丁寧な指導をすることを確かめ合いました。森邦博先生から玉稿をいただきました。感謝。

(吉永幸司)